短大英文科学生が見た英語教育

EFL as Junior College Students SEE IT!

(1988年4月7日受理)

沼 本 健 二
Kenji Numoto

Key word: 英語教育

I はじめに

現行の学習指導要領は，昭和49年の平泉試案に代表されるような，外国語教育に対する社会的批判を受けて改訂された[1]。改訂の基本方針として，「内容の程度や分量が一層適切なものになるように，基礎的・基本的な事項に精選すること」と，「言語活動の基礎を養うことを一層重視し，特に表現力の育成に配慮すること」の二点が考慮された[2]。その結果，昭和57年度に，現行の学習指導要領が高校において実施された時，文法教科書は姿を消し，いわゆる総合英語として，「英語I」と「英語II」が登場したのである。外国語教育の変革への期待は明白であったが，果たして，教室では何が起こったであろうか。

学習指導要領の実施に先立っては，その円滑な運用のために，「新しい英語教育」の理解を深める努力がなされた。特に，岡山県高等学校教育研究会英語部会（以下英語部会）は，昭和56年4月研究委員会を発足させ，岡山県下の英語教育の実態把握のため種々の調査を行った。同時に，「週3時間制」の下で学習した新入生を，「英語I」の教科書で指導するための対策について研究を続けた。その結果は，『調査研究・高校入学時と英語Iの指導』にまとめられた。それによると，指導時間の減少に伴う学力の低下を心配する教師は多く，97％が高校入門期に特別な指導・配慮が必要であると考えている[3]。また，高校における英語の学習で，生徒が最も困難を感じるのは文法である，と感じている教師は38％で，英作文（22％），文型・構文（20％）を断然引き離している。このような意識を持つ教師にとって，従来とは異なった方法で文法を指導しなければならない「英語I」の授業展開がしにくいと感じられるのは当然で，全体の41％，文法教科書を使い慣れていた普通科教師の59.2％が，戸惑いを表明している。この時点では，文法指導の視点が変わったことを示す資料は見つからない。むしろ，補助教材として，伝統的な文法問題集が使用されているのが現実であろう。しかし，その一方で，音声指導のためにテープを使用する教師が増加したり，基礎学力の不足している生徒に対する指導が緻密になるなどの傾向がみられる。

教育課程が変わった直後の動揺は，数年を経た現在ではもちろん見られない。ほとんどの教師が，入学試験を意識した伝統的な指導法に戻ったか，多少の変更を加えて，困難な状況に対する対応策を見出したか，のどちらかであろう。そして今，英語教師は，新たな問題の対応に迫られている。文部省が打出した，外国人英語講師（AET）の導入がそれである。昭和63年度は大幅な増員が計画されており，英語教師は，AETとの協同授業により，英語を使って英語を指導せざるを得なくなってきた。また，英語教師の海外派遣も計画されている。今，英語教師は変革を迫られているのである。

II 調査の目的

本調査の目的は，(1)本学英文科学生が経験した，高校時代の英語学習の実態を把握し，(2)現行学習指導要領実施直後の前記調査との比較を試み，学習実態の差を明らかにし，(3)本学入学後，学生が短大の専門化した講義・演習に一日も早く順応できるように配慮するための資料とすること，にある。

一般的には，短大の英文科は，教科課程編成の上で，社会の要請，学生の要求を満たす努力を払っている。本学英文科でも，英会話はもちろん，LL演習，書取り，速読，自由英作文等，受容と発表の両面に渡って，実用的英語力の養成ができるよう，教科課程に工夫がなされている。しかし，英文法，英語学概論，音声学などの専門科目においては，10年前の高校生ならば誰でも聞いたことがあるのに，現在の高校の教室ではほとんど用いられない文法用語が頻出する。中学校・高校での発音記号の指導もまちまちで，再指導を必要とする学生は多い。以上のように，本調査では，高校までの学習を前提として進めることの可能な講義科目と，補足的な指導を加えながら進まざるを得ない科目があることが判明するであろう。

次に，本調査を，この時期に行っておくことの意義について述べることにする。現行学習指導要領実施後数年を経て，教育現場では一応の落着きを取り戻した。中学校における「週3時間制」については，数年の経験から，冷静にして客観的な批判がなされるようになった。高校では，中学校での学習時間減少に伴う，新入生の学力低下に対応する方策も見つかり，適切な教材選択がなされるようになったと言われている。しかし，再び英語教師が対応を迫られる新たな問題が持ち上がったのである。前述したように，昭和62年度，文部省はJETプログラムを発足させ，全国で約800名の外国人講師を紹致した。未知の経験に取り組むことになったのである。AETの導入は，学習指導要領の改訂と比較して，はるかに大きな影響を英語教師や生徒に与えるものと期待されている。岡山県教育センターは，英語部会と協力して，『協同授業の進め方とその教材』を10月に発行し，協同授業に関する理解を深めるための指針とした[4)]。また，英語部会主催の秋の研究大会は，大会運営がほとんど英語で行われるという画期的な大会となった。英語教師は，今後，受験指導との兼合いを考慮しながら，AETの影響を受けとめていくことになろう。生徒への影響については，公的調査はまだ発表されていない。本学の昭和62年度入学生で，外国人教師の指導を受けたものはほとんどいないが，2・3年後には，英会話の時間に不安を感じる学生の数が減るであろうし，また新鮮味も感じなくなるであろう。大きな変化が起こる前に実態を把握しておくことは，対応を迫られた時の一助になるものと思う。

III 調査の方法

1 アンケートの作成

比較検討の便宜上，英語部会が行った「英語学習についての調査」を基に，高校での学習実態が把握できるよに調査項目に検討を加えた。ただし，辞書指導，発音記号に関する項目と，学習到達度の自己評価に関する項目については，中学校に関係する質問を残した。学生の興味・関心について知るために，英文科進学の目的・興味あるリーディング教材の種類を問う項目を追加した。

結果と考察は，質問2～17（資料参照）を下記の六つの大項目に分類して行うことにする。結果は百分率で示し，出身県別・校種別の相違は，考察の際必要な場合のみ言及する。英語部会の調査結果との

比較も，必要に応じて行う。大項目と質問番号との関係は次の通りである。

1）教育課程編成の類型（質問2）　2）高校での学習態度（質問3～8）　3）辞書指導（質問9）　4）発音記号のの扱い（質問10）　5）学習到達度の自己評価（質問11～15）　6）英文科進学の目的と興味・関心（質問16・17）

2　調査の対象と時期

昭和62年度入学の，本学英文科学生を対象にして，短大での英語学習をほとんど経験していない4月下旬に実施した。英語部会の調査対象生徒との間に，2学年の隔たりがある。出身地別，出身校種別の内訳は表1の通りである。県外出身者の内43名は，広島県出身者である。

表1　昭和62年度入学英文科学生の構成（欠席者は除く）

人数

校種別 ＼ 出身地	普通科	職業科	全　体
岡山県内	34	17	51
県　　外	42	6	48
合　　計	76	23	99

IV　結果と考察

1　教育課程編成の状況

高校で使用した教科書の種類については，その特徴を説明しながら選択させた。県内出身者と県外出身者に見られる特徴的な差異は，英語IIAと英語IIBの履修状況に現れている。英語IIAについては，県内出身者の6％に対し，県外出身者27％が履修している。英語I，IIに1科目のみ追加して履修した学生は，県内の場合19名いるが，そのうち14名は英語IIBを学習しており，県内出身者の28％に相当する。そのうち半数は職業高校出身者であった。少ない配当時間の中で受験指導をする場合，読解指導に重点を置かざるを得なかったことを示しているといえよう。県外出身者に「英語I，II＋1科目」の類型が少ないのは，職業高校出身者が少ないためである。

表2　教育課程編成の類型

％

出身地 ＼ 類型	県内	県外	全体
①I・II＋IIB・C	33	35	34
②I・IIのみ	24	23	23
③I・II＋IIB	28	6	17
④I・II＋IIA・B・C	4	17	10
⑤その他	11	19	16

2　高校での英語学習態度

回答から想像すると，平均的な学生は，次のような高校生活を送ったことになる。

英語の学習は，授業中心に進め，塾に通ったり，参考書･問題集で補足する（91％）。授業では，英文和訳をし（82％），先生の文法の説明を聞いて（32％），音読の練習をする（28％）。授業中にテープを聞くことはほとんどなかった（43％）。宿題はあまり出なくて（54％），家庭での英語の学習時間は，平均して30分から1時間であった（55％）。復習よりも予習に重点を置き（55％），教科書の全文をノートに写し（55％），未知の単語を調べ（67％），全文訳をしてノートに書いた（44％）。

これを英語部会の調査結果と比較してみると，復習から予習に重点が移ったこと，授業以外の学習に依存する傾向が見られることを除けば，文法訳読式の英語学習が続いていることが判る。注目に値するのは，テープレコーダーの使用に関する回答である。県内出身者の35％がほとんど聞かなかったのに対し，県外出身者の場合は，52％に上る。ほとんど毎時間聞いた学生は，前者が29％，後者が23％と，使用頻度にかなりの差が見られる。また，英語部会の調査では，78％の教師が，「聞く･話すこと」の指導

にテープレコーダーを活用する，と答えているが，学生の回答と比較すると多少のずれがある。使用頻度が，何らかの事情で減ったのかもしれない。

3　辞書指導

辞書指導については，中学校指導要領には，「辞書の初歩的な使い方に親しませるように指導することが望ましい」，高校学習指導要領には，「辞書の使い方を指導し，その使用の要領を得させるようにする」，とそれぞれ付記され，英語教育における辞書指導の重要性が，明確に位置付けされることになった。これにより，中学校における辞書指導は，義務付けられないまでも，一つの重要な課題となったのである。しかし，中学校英語教師の立場からみれば，週3時間制のもとでは，辞書指導にまで手がまわらない，というのが本音であろう[5]。それでも，昭和57年度の調査では，49%の生徒が中学校で辞書の引き方を習っており，高校入学時に，41%は，辞書で単語・熟語の意味を「よく調べることができる」，52%は，「大体調べることができる」，と答えている。英語の内容が易しいこの時点では，特別な辞書指導を必要としないようである。一方，高校教師に対する調査によると，高校入学時の生徒が「辞書が引けない」と答えた教師が30%である。そして，高校入学時の学習指導における，最重点項目として「辞書指導」を挙げた教師は39%で，「予習・復習の習慣」の28%を上回った。このことは，辞書を引く能力について，生徒の自己評価と教師の要求との間に大きな隔たりがあることを意味するばかりでなく，高校での英語学習の重点が予習に置かれ，辞書が自学自習の手段として重きをなすことをも反映しているといえよう。図3・4が示すように，教室での辞書指導が，一層徹底する傾向を見せているのもうなずけることである。

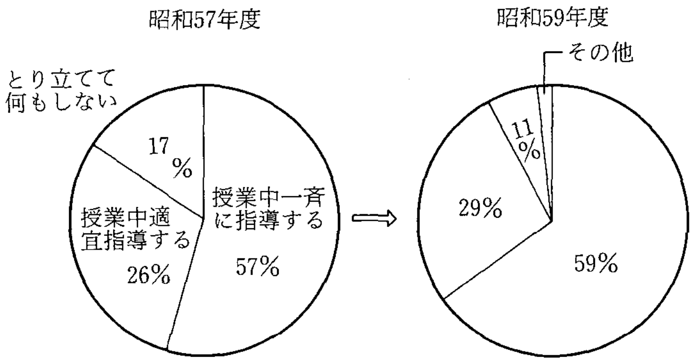

図3　辞書指導の仕方[6]

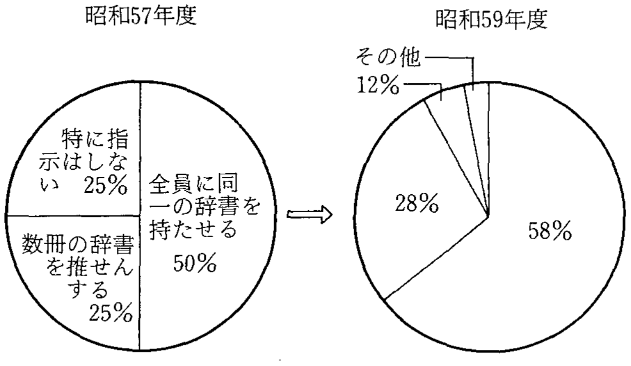

図4　辞書の持たせ方[6]

今回の調査では，高校時代に受けた辞書指導について質問を試みた。高校で辞書の引き方を習った学生は，県内出身者は24%，県外出身者は19%であった。この低い数字は，「適宜する指導」が，学生の記憶に残っていないためかもしれない。それにしても，県内出身者の示す数字は，上図で示した，高校での辞書の持たせ方，辞書指導の仕方の徹底振りと矛盾する。また，県外出身者の73%が，中学校で辞書指導を受けていることも記しておこう。

次に，現在，辞書で単語・熟語の意味を「よく調べることができる」と答えた学生は28%，「大体調べることができる」と答えた学生は62%であった。昭和57年度の調査と比較すると，前者の減少が目立っ

ている。高校での英語の内容の難化が主な原因であることは否定できないが，高校で使用した辞書に適した指導が，本学学生にとっては，徹底していなかったともいえよう。

現在の学習辞典は、発音・意味・形態・語法などの検索だけでなく，社会・文化的背景に関する情報を得るためにも重要な手段となってきた。その上，それぞれの辞書が豊富な特色を備えている。そのために，辞典としての約束事が増加し，相当慣れないと使いこなすことは困難である。辞書を引くこつを会得するにつれて，英語学習の楽しみを増幅させた人が多いことを考慮すれば，学習の進度に合わせた辞書指導は欠かせないであろう。

4　発音記号

発音記号については，学習指導要領に付記があり，中学校では「実際の音声指導の補助として，必要に応じて発音表記を用いて指導してもよい」，高校では，「実際の音声指導の補助として，発音表記を用いて指導することが望ましい」，となっている。辞書指導に関する付記より弱い表現を使っており，中学校はもちろん，高校でも，発音記号の指導は義務づけられてはいない。また，ほとんどの教師が，重点指導目標の中に含めていない。

昭和57年度の調査では，59%の生徒が，中学校で発音記号の読み方を習っているが，今回の調査では，県内出身者の43%しか習っていない。高校では，31%と，さらに減少する。発音記号が読めるかどうかという質問に対し，「大体読める」と答えたのは，県内出身者の35%で，普通科高校出身者の多い県外出身者の場合は42%である。また，フォーニックスを習った学生は5%にすぎず，教室に浸透しているとはいえない。すなわち，50%強の生徒は，新出語を音声化する手段を持っていないことになる。

発音記号に関する知識は，中学校・高校とは違って，短大では重要である。第一に，英文科の学生として積極的に学習を進めるためには，辞書と同様，自己学習能力を高める手段となる。第二に，音声学・英語学などの専門の講義では，ある程度の知識は前提となる。従って，入学前に習得しておくことが望ましいのであるが，調査結果からみる限り，入学後早急に指導しなければ，その後の学習に影響があることは明白である。

5　学習到達度の自己評価

進路選択の上で，教科の成績は重要な役割を果たす。自分の学習到達度に不安を持つ学科については学習の動機付けは乏しく，得意に思う学科の学習意欲は旺盛になる。このことは，客観的に測定された到達度とは必らずしも関係ない。

本調査では，語彙力と，話す能力を除いた3技能について，中学校三年の英語と英語Ⅰ・Ⅱを基準として，自己の英語力の評価をさせた。日頃の学習を通じて，自己の英語学力についてどの程度の評価をしているかを調べ，今後の調査の基礎資料としたい。

中学校の英語について，昭和57年度の調査と比較してみると，本学学生の自己評価は，4つの分野全部について高い。順位は，評価の高い方から，読む能力，語彙力，書く能力，聞く能力となっているが，聞く能力が一番低いのは，教室での指導が十分なされていないために，文字を見ないで英語を理解することに不安を覚えているためであろう。本学英文科学生の多くは，入学当初，英会話の時間に一番不安を感じているようであるが，一学年の終りが近くなる頃には，最も伸びたと思うのは聞く能力である，と言えるようになる。早い時期から，聞く能力を高める指導がなされておれば，発表技能である書く能力より低く評価することはないであろう。

英語Ⅰ・Ⅱについては，評価の順位は中学校の英語の場合と同じであるが，いずれもかなり低く評価

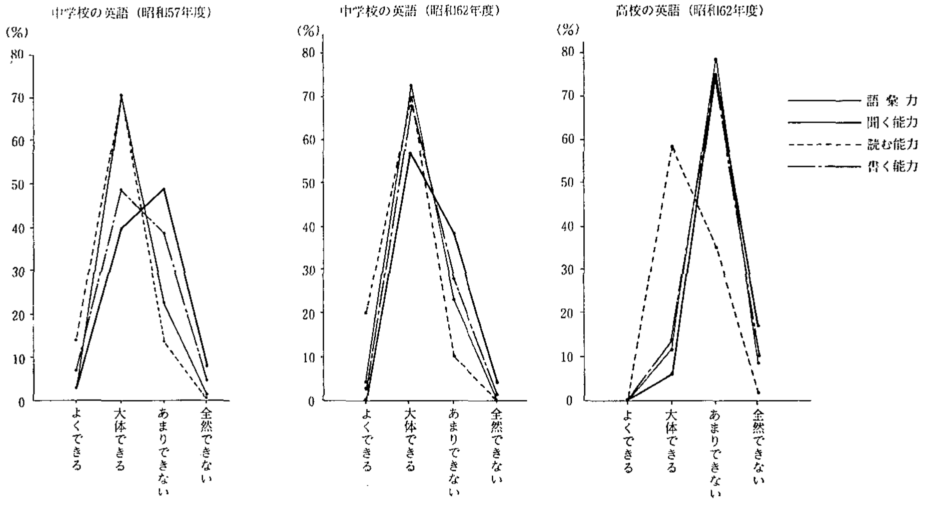

図5　学習到達度と自己評価

している。高校での英語学習が，教材の難化に追いつかなかったためである。その中でも，読む能力が比較的高い評価を維持しているのは，質問が音読の能力を評価するよう求めているからである。「読んで理解できますか」という表現を使っていたら，自己評価はもう少し低くなっていたであろう。ここで特に記しておきたいのは，音読に対する高校教師の評価である。昭和57年度の調査によると，高校入学時の指導上困難な点として，35%の教師が音読を挙げている。辞書を引く能力と並んで低く評価されている。音読が，教師が期待しているほどできないのは，ただ音読の練習をしないからだけではない。聞き取りの練習によっても伸びることが指摘されていることを忘れてはならない。

昭和57年度の調査は，高校入学後しばらくして行われたものであるが，59%の生徒が高校での英語学習がむずかしいと答えている。これは，英語Ⅰと中学校の英語とのギャップが大きく感じられること，高校での英語学習に戸惑っていること，教師の英語Ⅰの指導に迷いがあること，などの原因によるものと思う。学習指導要領改訂直後に，旧課程の英語に慣れていた教師が，ややむずかしめの教科書を選択したとしても不思議はない。教師の側には，英語Ⅰにおける文法の扱い方について迷いがあり，中学校から高校に移された指導項目を把握するだけの時間はなかったであろう。このようにみると，前述の調査対象者から2年遅れて高校教育を受けた本学学生で，高校の英語がむずかしかったと考えたものが38%しかいないことの説明は，次のようにすればよい。

現行学習指導要領実施後2年間で，英語教師は，中学校での学習項目に精通し，それぞれの学校の生徒の能力に合った教材を選び，高校での既習事項と未習事項の把握が十分でき，文法指導の対策も見つかり，そして，総合英語としての英語Ⅰの指導にも慣れてきた，と。

高校での英語学習がむずかしい，と思った理由を三つまで選ぶよう求めたところ，三つ選んだ学生は少なく，「新しい単語・熟語が多い」(42%)，「新しい文法・構文が多い」(46%)，「文法事項が多い」(39%)，の三項目に回答が集中した。昭和57年度の調査でみられた，「授業の進度が早い」（36%），「授業内容が高い」（14%）などの理由がほとんどなくなった。前述の説明を裏付ける結果だと思う。

6　英文科進学の目的と興味・関心

すべての学習に動機付けが重要であるように，英語学習についても，それは欠かせない。入学後の成

績はもちろん，大学生活全体に大きな影響を与えるものである。

この質問は，学生がどのような目的意識を持って入学してくるかについて，概略を把握しておくためのもので，選択肢は三つにまとめ，その他の目的があれば，記述できるようにしておいた。回答者の多い順に挙げると，「好きで興味もあるから」(43%)，「将来就職などで必要となるから」(33%)，「教養として身につけたいから」(26%)，となった。理由のない学生はほとんどいなかった。

興味・関心については，読み物として読みたいものを，10項目の中から二つ選ぶよう求めた。多い順に五位まで挙げると，小説（58%），ミステリー・SF（53%），児童文学（25%），詩（20%），随筆・伝記（13%）であった。小説はともかくとして，詩や随筆の人気がまだ高いのは意外であった。

ほとんどの学生が，英語を話せるようになりたいという強い願望を持っていると思われるが，そのような実用的な目的意識に止まらず，幅広い教養を身につけたいという学生もかなりいるようである。

V　ま　と　め

今回の調査は，中学校・高校における英語教育の実態を把握することにより，本学英文科学生の指導上留意すべき点を明らかにしようとするものであるが，その結果をまとめると次の通りである。

(1) 学習指導要領改訂後，英語教育は変化しつつあるが，多くの学校で伝統的な指導法が行われており，従って，音声指導は不十分なため，学生は，聞く能力に自信を失っている。

(2) 英文科学生の使用すべき辞書を，その約束事に留意しながら使いこなせるように指導する必要を認める。

(3) 発音記号の指導は不十分で，入学後早い時期に指導することが望ましい。できれば，辞書指導と併行して行うのが能率的であろう。

(4) 学生の目的意識ははっきりとしており，正しい方向付けと適切な指導により，学習効果を挙げる可能性を持っている。

本調査をまとめるに当たって，はからずも学生の眼を借りて英語教育を見ることになったが，このことは，個々の学生の姿勢や要求をよりはっきりと見る機会を提供してくれることにもなった。次回は，AETの指導を受けた学生の眼を借りて，本学における英文科のあり方を探ってみたいと思う。

参　考　文　献

1）平泉渉・渡部昇一　『英語教育大論争』，文芸春秋社，1975.

2）文部省　『中学校指導書・外国編』，1978.

3）岡山県高等学校教育研究部会英語部会研究委員会　『調査研究・高校入学時と英語Ⅰの指導』，1985.　以後英語部会が実施した調査結果は同書によるものである。

4）岡山県教育センター　『中・高等学校英語学習指導資料・協同授業の進め方とその教材』1987.

5）「昭和59年度岡山市英語科中高連絡会西ブロック資料集・中学校現状報告」

6）岡山県高等学校教育研究部会英語部会研究委員会　前掲書　p.42

資料

英語学習について

中国短期大学英語英文科

＿＿＿＿ 番　氏名 ＿＿＿＿＿＿＿＿

この調査は成績とは関係ありません。あなたの思っていることをありのまま書いて下さい。答はすべて符号を右の線の上に記入して下さい。

1．ア　男　　イ　女　＿＿＿＿

2．高校の英語の教科書は右のどれでしたか。
ア．英語Ⅰ・Ⅱのみ　イ．英語Ⅰ・ⅡとⅡA
ウ．英語Ⅰ・ⅡとⅡB　エ．英語Ⅰ・ⅡとⅡC
オ．その他（　　　　　）
＿＿＿＿

3．高校生の時，家庭での英語の学習時間は平均して一日にどのくらいでしたか。
ア．約2時間以上　イ．約1時間30分
ウ．約1時間　エ．約30分
オ．全然やらなかった
＿＿＿＿

4．高校生の時の家庭での英語学習を右のように分けた場合，主としてどれにあたりますか。
ア．学校の授業中心に学習
イ．学校の授業とそれ以外の学習
ウ．学校の授業以外の学習を中心に　＿＿＿＿

5．4でアまたはイを選んだ人のみ答えて下さい。

(1)　予習と復習の関係は右のどれでしたか。
ア．予習のみ
イ．予習を復習よりよくやった
ウ．予習と復習を半分ずつ
エ．復習を予習よりよくやった
オ．復習のみ　＿＿＿＿

(2)　高校の授業の予習として右のどれをやりましたか。主なものを三つまで選んでよろしい。
ア．教科書を音読する
イ．教科書のテープを聞く
ウ．未知の単語を調べる
エ．全文をノートに書く
オ．大切な部分をノートに書く
カ．全文を日本語に直す
キ．大切な文のみ日本語に直す
ク．大切な文を覚える
ケ．単語・熟語を覚える
コ．教科書ガイドを読む　サ．その他
＿＿＿＿

6．4でイまたはウを選んだ人のみ答えて下さい。
家庭での授業以外の学習は右のどれでしたか。主なものを一つまたは二つ選んで下さい。

ア．『基礎英語』『続基礎英語』『英会話』等のラジオの利用
イ．『セサミ・ストリート』『英語会話Ⅰ』等のテレビの利用
ウ．英語の物語・新聞・雑誌
エ．参考書，問題集をやる
オ．学習塾，家庭教師
カ．通信添削　キ．会話学校
ク．文通　ケ．その他（　　　　）

____

7．(1) 高校での英語Ⅰ，Ⅱの授業は右のどれが中心だったと思われますか。主なものを一つまたは二つ選んで下さい。

ア．音読をする　イ．ヒアリングをする
ウ．英文和訳をする　エ．要旨をまとめる
オ．（全文，重要文を）暗唱する
カ．教師，友人との対話をする
キ．文法の説明を聞く
ク．ディクテイションをする
ケ．単語，熟語を覚える
コ．小テストをする　サ．その他

____

(2) 高校での英語Ⅰ，Ⅱの時間にテープをどれくらい聞きましたか。

ア．ほとんど毎時間　イ．ときどき
ウ．ほとんど聞かなかった

____

8．(1) 高校での英語の宿題はどのくらいでしたか。

ア．多い方だった　イ．普通だった
ウ．少なかった　エ．全然なかった

____

(2) 高校での英語の宿題をやりましたか。

ア．全部やった　イ．普通だった
ウ．時々やった　エ．全然やらなかった

____

9．(1) 高校で辞書は何を持っていましたか。

ア．英和辞典　________
イ．和英辞典　________

(2) 中学校で辞書の引き方を習いましたか。

ア．はい　イ．いいえ

____

(3) 高校で辞書の使い方を習いましたか。

ア．はい　イ．いいえ

____

(4) 現在辞書で単語，熟語の意味をよく調べることができますか。
ア．よく調べることができる
イ．大体調べることができる
ウ．あまり調べることができない
エ．ぜんぜん調べることができない ＿＿＿＿＿

10．(1) 中学校で発音記号の読み方を習いましたか。
ア．はい　イ．いいえ ＿＿＿＿＿

(2) 高校で発音記号の読み方を習いましたか。
ア．はい　イ．いいえ ＿＿＿＿＿

(3) 現在発音記号を読むことができますか。
ア．よく読める　イ．大体読める
ウ．あまり読めない　エ．全然読めない

(4) フォーニックスを習いましたか。
ア．はい　イ．いいえ ＿＿＿＿＿

11．(1) 中学校で習った単語の意味を覚え，つづりを正確に書くことができますか。
ア．よくできる　イ．大体できる
ウ．あまりできない　エ．全然できない ＿＿＿＿＿

(2) 高校で習った単語の意味を覚え，つづりを正確に書くことができますか。
ア．よくできる　イ．大体できる
ウ．あまりできない　エ．全然できない ＿＿＿＿＿

12．(1) 現在中学三年生の教科書ぐらいの英語がすらすら読めますか。
ア．すらすら読める
イ．多少つまづく個所もあるがだいたいすらすら読める
ウ．つまづく個所が多くてなかなか読めない
エ．全然読めない ＿＿＿＿＿

(2) 現在高校の英語IIの教科書の英語がすらすら読めますか。
ア．すらすら読める
イ．多少つまづく個所もあるがだいたいすらすら読める
ウ．つまづく個所が多くてなかなか読めない
エ．全然読めない ＿＿＿＿＿

13．(1) 現在中学校三年生の教科書ぐらいの英語がかけますか。
ア．よく書ける　イ．大体書ける
ウ．あまり書けない　エ．全然書けない＿＿＿＿＿

(2) 現在高校の英語I，IIぐらいの英語がかけますか。
ア．よく書ける　イ．大体書ける
ウ．あまり書けない　エ．全然書けない＿＿＿＿＿

14．(1) 現在中学校三年生の教科書ぐらいの英語のテキストを見ないでテープを聞いて内容がわかりますか。
ア．よくわかる　イ．大体わかる
ウ．あまりわからない
エ．全然わからない ＿＿＿＿＿

(2) 現在高校英語Ⅰ，Ⅱぐらいの英語をテキストを見ないでテープを聞いて内容がわかりますか。
ア．よくわかる　イ．大体わかる
ウ．あまりわからない
エ．全然わからない　＿＿＿＿

15．(1) 高校での英語学習が難しいと思いましたか。
ア．難しいと思った
イ．どちらとも思わなかった
ウ．やさしいと思った　＿＿＿＿

(2) あなたが高校での英語学習が難しいと思ったのは右の理由のうちのどれですか。主な理由を三つまで選んでよろしい。
ア．新しい単語，熟語が多く覚えることができない
イ．新しい構文，文型が多く理解できない
ウ．文法事項が多くて整理して理解できない
エ．発音が難しい
オ．授業の進度が早く，ついていけない
カ．授業の内容が高く，ついていけない
キ．宿題が多くてやり終えることができない
ク．テストが難しすぎる　ケ．その他
＿＿＿＿

16．英文科に進学した目的は何ですか。
ア．好きで興味があるので
イ．教養として身につけたいから
ウ．将来就職などで必要となるから
エ．その他（　　　　　）
＿＿＿＿

17．外国語の講読の教材としてどのようなものを読みたいと思いますか。次の中から<u>二つ</u>選んで下さい。
ア．小説　イ．ミステリー・SF
ウ．戯曲・シナリオ　エ．随筆・伝記
オ．児童文学　カ．詩
キ．紀行文（生活・民俗・風土等）
ク．言語学　ケ．論文（政治・経済）
コ．時事文　＿＿＿＿

＊ご協力ありがとうございました。